

戦前の竹島アシカ猟の記憶

本社写真13枚発見



竹島でアシカを生け捕りにする漁師ら＝1934年6月

2019.5.19 03



竹島

隠岐諸島の北西約157キロにある孤島で、二つの小島と岩礁からなる。島根県隠岐の島町にあるが、日韓双方が「固有の領土」と主張している。日本は1905

日本海の孤島「竹島」で戦前に盛んだったアシカ猟の様子をとらえた写真が、朝日新聞大阪本社に保存されていた。1934年6月、島根県・隠岐の島の漁師らに同行ルポした際に撮影された計13枚。研究者は当時の生業を伝える貴重な記録と評価している。本社が所蔵する総計20

0万枚に及ぶプリント写真のデジタル化を進める作業の過程で見つかった。2017年には、戦前の沖縄で撮影されたネガ277コマも見つかっている。

大阪本社の資料室に各種の資料写真を収めた「凶鑑」という箱があり、動物の写真が入った45の封筒のうち、アザラシ、アルマジ

赤神内(アシカ)の資料(現)

口、イルカなどと並んで「あしか狩 リャンコ島」と書かれた封筒があった。山陰地方の漁師は竹島をリャンコ島とも呼んでいた。

写真はその裏書きから、大阪朝日が1934年6月28日と7月8日に掲載した計11回の連載「日本海のアシカ狩」の取材時のものと

動物園用生け捕り主流

「死の大猛闘 怒れる北海の荒獅子にひかれて」冒頭こんな見出しを掲げた連載記事「日本海のアシカ狩」は本紙の松浦直治記者と長谷川義一カメラマンが担当した。2人は隠岐の島在住の吉田重太郎さんが操縦する木造船「神福丸」に同乗し、漁師らと竹島で10日間のテント生活を

「死の大猛闘 怒れる北海の荒獅子にひかれて」冒頭こんな見出しを掲げた連載記事「日本海のアシカ狩」は本紙の松浦直治記者と長谷川義一カメラマンが担当した。2人は隠岐の島在住の吉田重太郎さんが操縦する木造船「神福丸」に同乗し、漁師らと竹島で10日間のテント生活を

シカ狩」の取材時のものとわかった。紙面では計20枚が使われているが、見つかった13枚のうち7枚は紙面に掲載された写真だった。残る6枚は未掲載のもの。紙面には載ったが、見つからなかった13枚は取材先へ進呈されたとみられる。

を上げた。神福丸の船長、吉田重太郎さんの孫の徹さん(86)は「こんな写真が残っていたとは。少し改造されているが、子どものころに見た神福丸の姿が懐かしい」と語る。重太郎さんはアシカ猟を「トド捕り」と言っていたという。出猟の拠点、久見漁港の近くで暮らす漁師の前田芳樹さん(67)は「祖父からよく聞かされた光景を眼前にしたようだ」と喜んだ。祖父の峯太郎さんは33〜41年、アシカ猟に従事していたという。

年に領土へ編入を決め、島根県が同年2月に帰属を告示した。その後、10年に韓国併合条約が結ばれた。戦後、51年のサンフランシスコ講和条約調印後、韓国は52年当時の李承晩(イ・スンマン)大統領が「李承晩ライン」(65年に廃止)を公海上に設けて領有を唱え、54年から武力要員を常駐させた。「竹島の日」(2月22日)は、島根県が編入の告示をして100年後の2005年、条例で制定された。

網を仕掛けてアシカを捕らえ、一頭ずつ木製のおりに入れる様子を連載は描く。島内の洞窟を探検したり、鳥類の生態も紹介したりした。

アシカは動物園やサーカスへ高値で売れたが、37年に日中戦争が始まって世相が戦時一色になると、需要も途絶えていった。竹島のアシカ猟を研究する島根大学の船杉力修准教授(地理学)は現存する写真について「竹島で営まれた生業を記録した極めて貴重なものだ。猟の詳細や当時の島の様子をさらに解明したい」と話す。

「極めて貴重」

専門家

隠岐の島で関係者に写真を見せようと、驚きの声

(編集委員・永井靖二)